

【事業概要】

ヒレジャコ養殖生産力向上技術の開発 — (1) 過年度種苗を用いた海面養殖試験— (水産海洋研究費 (県単独事業))

伊藤寛治*, 服部素直

ヒレジャコ (*Tridacna squamosa*) はいわゆるシャコガイ類の一種で、熱帯・亜熱帯の浅海域に生息する大型の食用二枚貝である。本県において、本種はサンゴ礁の水産資源として伝統的に利用されてきたほか、観光客向けに南国感を演出する食材としての需要もある。本種の生物学的な特性としては、他のシャコガイ同様に外套膜に褐虫藻と呼ばれる渦鞭毛藻類が共生し、その光合成産物に栄養を依存する点が挙げられる。この特性は、後述する無給餌養殖にもつながっている。本種の養殖は、本県においては、県栽培漁業センター（以下、栽培セ）が生産・配付する種苗を使用したケージ式養殖（第1種区画漁業権に基づく貝類小割式養殖）により、主に温暖な八重山諸島で営まれている。養殖対象種としての本種は、市場規模や単価で他種に劣るものの、安価な種苗コスト（0.7円/mm）、成長が速く大きくなること、給餌作業や環境負荷が無い無給餌養殖が可能といった利点があり、沿岸漁業者の複合経営構成要素となり得る存在である。

本種の養殖に関しては、種苗導入後の生残率が低いことが問題とされており、生産者は低水温による衰弱と食害を主な原因として挙げ、種苗配付サイズの大型化が対策になると認識している。そして、令和2年度以降、生産者側から県に対して大型種苗の供給や食害対策等についての要望が出されている。一方、種苗配付サイズの大型化については、種苗の生産コストや輸送コストが増大し、安定供給が困難となる可能性もある。そこで、最適な種苗サイズの検討と大型種苗の生産に必要な種苗越冬方法の効率化、併せて食害実態の把握を目的として、(1) 生産者養殖場調査、(2) 海面

養殖試験、(3) 冬期中間育成の効率化、を計画した。

令和6年度は、栽培セのヒレジャコ種苗生産の不調のため試験用種苗を確保できず、また養殖用種苗配付が無く養殖場調査を実施しなかった生産者も複数あった。この状況下でも可能な当初目的に沿った取り組みとして、(2) 海面養殖試験に関して、令和4～5年度に栽培セで生産された後当支所の陸上水槽で飼育していた個体を用いて試験を開始した。令和6年12月21日、川平湾内（川平湾小島周辺）に設置された鉄筋及びネトロンネットで構成されたケージ内に令和4年度産のヒレジャコの沖出しを行った。ヒレジャコはケージ番号12と13の2つのケージ（いずれも2.25㎡）に収容し、収容数はそれぞれ、前者が130個（平均殻長114.3±20.8mm）、後者が70個（平均殻長152.2±3.9mm）であった。令和6年12月25～26日、同海域の別ケージに令和5年度産のヒレジャコを沖出しした。12月25日にはケージ番号9と11の2つのケージ（いずれも2.25㎡）に貝を収容し、収容数は順に、220個（平均殻長58.6±5.4mm）、142個（平均殻長78.2±6.0mm）であった。12月26日にはケージ番号17（2.0㎡）に633個（平均殻長53.7±7.2mm）の貝を収容した（図1（左））。

種苗生産機関の生産不調に試験実施の可否が左右されることを防ぐため、試験用種苗の自主確保に向けた準備も進めた。令和6年5月29日、川平湾マジャパナリ沖で養成しているヒレジャコ親貝を材料とし、セロトニン注射による産卵誘発テストを行った。宮古農林水産振興センター岩井主任技師の指導の下で実施したが、今回は採卵には至らなかった（図1（右））。

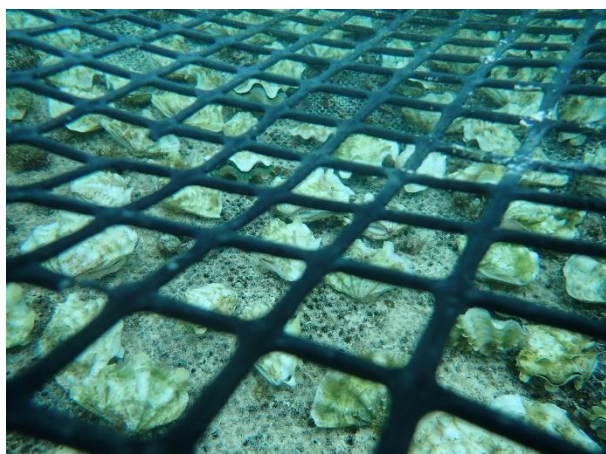


図1 海面養殖試験のため川平湾内のケージに収容したヒレジャコ（左）とヒレジャコ親貝産卵誘発テストの状況（右）

*E-mail : itouhiro@pref.okinawa.lg.jp 石垣支所（現所属：漁港漁場課）